
2009年度秋学期レポート

日本ASL協会実施・日本財団助成聴覚障害者海外奨学金事業

第3期生

管野奈津美

Master of ASL and Deaf Studies, Gallaudet University



アメリカ側から見たナイガアラの滝（反対側の建物はカナダ）

はじめに

ついにあっという間に大学院の2年生になってしまった。1年生は幅広く学んでいく感じだったが、2年生は理論を学んだ上でろう学分野と自分の研究にどう活かしていくかという実践的な授業が多かったように思う。さらに修士論文の調査にも追われ、慌ただしい学期であった。学期末のThanksgiving Day (感謝祭)休暇を利用してロチェスターとカナダのトロントに行って調査をしたのでそれについても報告したい。今学期履修したクラスは以下の通りである。

Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
		9:30-12:20 am Deaf Visual Culture: Art, Theory, and Resistance	9:00-11:50 am Identity and Theory in Deaf Studies	
		1:00-3:00 pm Cultural Studies Research Project I		

1. DEAF VISUAL CULTURE: ART, THEORY, AND RESISTANCE

視覚文化の理論を学んでいき、最終的にDeaf Studies (ろう学) の分野でどのようにその理論を使って「手話で話し、手話を読み取る」、まさに「視覚の人」であるろう者を分析していくクラスである。まず目の仕組みや視覚的心理を学び、次に声が距離に比例して変わっていくデータに基づいて、手話も距離に比例するかどうか調べるために実験をした。外のグラウンドで2人の学生が向かい合って手話で話し、どんどん距離をひろげていき、それを写真・ビデオ撮影した。結果として手話も距離によって変わっていく様子が見られ、面白かった。さらに読んだ本の中で面白かったのは、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、日本ごとに空間に対する感覚や使い方が異なるという論文であった。それなら視覚に頼るろう者も空間に対する感覚や使い方が健聴者と異なるのではという話になり、去年の受講生が最終プロジェクトとして研

究したビデオ資料を見させてもらった。Gallaudet Universityの食堂には円形のテーブルが並べられているのだが、もし長方形のテーブルを並べた場合、どう変わるかという実験であった。長方形のテーブルを並べてみると学生が自分で体のテーブルに対する角度や椅子の位置を変えて調整したりする様子が見られた。円形でも長方形でも会話に他の学生が加わろうとするとそこに座っていた学生全員が椅子を動かして移動するのである。それも手話が見やすいように人と人の間の適度な距離を保つためである。それこそ、ろう者が本能的に身につけた身体的感覚ではないだろうか。とても興味深い実験結果であった。また近年では、ろう者の脳内メカニズムや身体的感覚についての研究も活発に行われている。これも含めて Gallaudet Universityでは「デフスペース (Deaf Space)」というろう者の身体的感覚に合わせた空間デザイン研究が進められており、これから注目していきたいものである。

2. THEORY & IDENTITY IN DEAF STUDIES

マルクス主義、ナショナリズム、ポストコロニアル主義などの理論を学び、最終的にろう者が社会の中で置かれている状況を分析して議論していくクラスである。様々な理論を英語で読んで理解していくのはとても難しいが、議論自体はとても楽しい。ろう者の置かれている状況を客観的に分析していくのにとっても役立っている。そういう状況を冷静に分析していくことで初めてろう者とは何なのか説明できるようになるのではと思う。例えば、仮にろう文化をろう文化だと主張しても多民族国家のアメリカと主に日本人だけで構成されている日本（正確にはアイヌや在日韓国人、外国人もいるが圧倒的に日本人が多いといえよう）では受け止められ方が異なる。単に主張するだけではなく、理論をどのように上手く使って相手が理解しやすいよう説明するかが重要となる。日本もアメリカも同じだが、ろう教育などの問題でろう者当事者の意見が反映されていないことが多い。もっと当事者が入り込んでいけたらいいのだが、そう簡単に上手くないものである。これまでは聴者が理解してくれないからだとか責任を押し付けるような感じで終わっていたが、なぜそういうことが起きるのかもポストコロニアル理論の視点から議論していき、とても新鮮だった。なぜそういうことが起きるのか冷静に考えた上でこれからどう改善していくか考えていく方がもっと重要であると感じた。

3. CULTURAL STUDIES RESEARCH PROJECT I

修士論文のための指導クラスで、指導教官と1対1で指導を受けることになっている。1週間に1度のペースで先生と現況報告、そしてこれからどのように進めるか話し合っている。夏休みに行ったヨーロッパのろうのアーティスト

ト達にインタビューした映像を分析し、その作品について分析した。その結果をもとにこれからどのように進めていくか話し合った。先日やっと修士論文のテーマを決めたので今は資料収集しながら準備を進めているところである。修士論文は私が所属する専攻で必須となっており、修士論文を提出することで卒業が認められるので頑張っていきたい。

ROCHESTER INSTITUTE OF TECHNOLOGY(RIT)& NATIONAL TECHNICAL INSTITUTE FOR THE DEAF(NTID)

学期末のThanksgiving Day(感謝祭)休暇を利用してニューヨーク州のロチェスターにあるRIT: Rochester Institute of Technology (ロチェスター工科大学) とNTID: National Technical Institute for the Deaf (国立ろう工科大学)を訪れた。NTIDにデフアートを研究している方がおり、その方に会って来るのが第一の目的であった。クラスでもデフアートを教えているらしく、そのカリ



(図1) Joseph F. and Helen C. Dyer Arts Center

キュラム資料やサマースクールで行われたデフアートのワークショップを録画したDVDなど貴重な資料を頂き、修士論文についても色々アドバイスを頂き、とても有意義な面会であった。NTIDの建物内にJoseph F. and Helen C. Dyer Arts Centerというギャラリー(図1)があり、デフアートの作品を中心に展示している。私が訪れたときはろう者女性2人によるテキスタイルの作品が展示されていた。中にはテキスタイルと手話を組み合わせた作品もあり、興味深かった。

DEAF CULTURE CENTRE

カナダのトロントにDeaf Culture Centreというセンターがあり、その見学も兼ねてそのディレクターにインタビューしてきた。トロントはロチェスターから国境をはさんで車で数時間ほどのところにある。まずロチェスターから車でトロントに向かい、国境沿いの観光名物のナイアガラの滝を見てきた。天気も悪く、とても寒かったが滝が力強く流れていく圧巻な景色を生で見ることができた。Deaf Culture Centreでは定期的にデフアートの展示をやっており、私が訪れたときは北米・オーストラリア・ヨーロッパから集めたろう者に



Deaf Culture Centre内の展示風景

よって製作された映画・短編映画・アニメーション・ドキュメンタリーなどを上映していた。それと平行していくつかのデフアートの作品が常設展示しており、デフアート関係の本やグッズなども売られていた。まずディレクターに建物内を案内して頂き、カナダのデフアートをいくつか紹介してくれた。それから Deaf Culture Centre を設立した理由について「ワークショップやフェスティバルを通してデフアートをアピールしていくのも一つの方法だが、ろう者と聴者が両方ともいつでも気軽に立ち寄ってデフアートについて学べる場所・環境を作るのも大切なアピール方法の一つだ」と話してくれた。それとアートの作品を収集していく役

割も果たしている。建物があれば各地に散らばっているデフアートの収集・保存がしやすくなるからである。収集したものをデータベース化し、ホームページに掲載している。とても素晴らしい試みだと思う。こういう場所はとても貴重だと感じた。

まとめ

NTID と Deaf Culture Centre 訪問は前から行きたいと思っていた場所であったので、念願がかなってよかった。少しずつであるが、私がやりたいことを少しずつ形にできていると実感している。また、デフアートの研究についてのネットワークを構築しつつある。今回の調査で得たことを今後の修士論文に生かしていけたらと思っている。次学期は卒業に向けて重要な学期となるので気を引き締めていきたい。